清末民初上海における日本人の商業活動について (1896-1914)

——『申報』の日本広告を中心に——

謝　　薇

A Study on the Japanese Businessmen and Their Business Activities in Shanghai during Late Qing and Early Ming Period:

From the Perspectives of Japanese Advertisements on Shen Newspaper

XIE Wei

Japanese businessmen in Shanghai conducted various business activities after the Jiawu China-Japan War. Advertisements were one of them. During 1896-1914, the number of Japanese advertisements on Shen newspaper reached to more than 1000. This paper researches on the form and content of these advertisements to learn about the condition of the Japanese business activities during the period. Moreover, through the study on the Japanese advertisements, the paper identifies some missing or wrong historical records on the Japanese businessmen and their business activities.

キーワード：申報　広告　在上海日本人　商業活動

一　はじめに

1894-1895年の日清戦争の結果、日本は清国と1895年４月17日の下関講和条約、1897年７月21日の日清通商航海条約並びに付属議定書を締結し、清国の開港場における日本人の居住や貿易に関する最恵国条款を取得することになった。日本は上海やその他の開港場における租界設置権を獲得し、上海における租界関係国の一国となった[1)]。日清戦争直前の日本人の上海での居留民数は1,000人前後であったが、1905年に上海に居住する日本人は4,331人となり、４年後には8,057人に増加し、1915年には11,457人と

1）高綱博文『国際都市——上海のなかの日本人』、研文出版、2009年３月、14頁。

なった。当時イギリス人の居留民を抜いて在留外国人数で第一位を占めた[2]。上海海関の統計によれば1894年の上海における日本の商号はただ9社であったが、日清戦争から第一次世界大戦直前の1913年まで、上海における日本の商号は1,269戸に増加した[3]。しかも、日清戦争の講和条約である下関条約の第六条第四項に見られるように、中国は開港場における日本人の工業企業の設立権と機械の輸入権を承認した[4]。日本は日清戦争を契機として上海において投資活動を開始した。日本の洋行は次第に欧米洋行に取って変わり、日本と上海の間の輸出入貿易を独占した。日本の財団を強力な後ろだてとした日本の洋行、例えば三井、三菱、大倉等の商社が、日本の主要な商品の対華貿易を寡占していた[5]。これらの企業等の経済活動、商業活動を象徴する重要な具体的証拠が当時の新聞に掲載された広告である。

この時期の上海における最大の有力な商業新聞が『申報』[6] であった。『申報』において多くの日本広告[7] が見られる。1896年から1914年までの『申報』に見られる日本広告から、上海における日本人の商業活動について考察してみたい。関連する先行研究には主に『支那経済全書』(東亞同文書院、1909年)、『日本対滬投資』(中国国民経済研究所、1937年)、『上海史話』(米沢秀夫、1942年)、『進入上海租界的日本人』(譙枢鋁、1988年)、『上海対外貿易』(上海市国際貿易学会、1989年)、『上海の日本人社会』(小島勝　馬洪林、1999年)、『近代上海日資工業史』(許金生、2009年)、『上海に生きた日本人』(陳祖恩、2010年) 等がある。これらの著作は日本と上海の貿易、日本の上海における投資、上海における日本の洋行、工場等の状況について詳しい研究となっている。しかしながら、以上の先行研究において日本広告の視点からの上海における日本人の商業活動については明らかにされていない。

そこで、本論では1896-1914年にわたる19年間の『申報』に見られる日本広告を詳しく検討し、日本広告の内容を考察し、清末民初上海における日本人の商業活動の状況を明らかにするものである。

二　清末民初上海における日本商号

清末民初上海における日本人の職業の種類は非常に多く、輸出入の貿易業、金融業、医薬業、出版業、娯楽業、工場等の職業は最も一般的なものであった。日本の外務省の通商局が編纂した『海外各地在留本邦人職業別人口表』によれば、大正3年6月末 (1914年) には上海の日本居留民の職業の種類は88種類に達していた。これらの日本人も商業活動にとって広告の大切さをよく分かっていた。明治41年 (1908) 東亜同文会が発行した『支那経済全書』の第七輯の第六編において、当時中国の広告の種類、基本状況などの情報を紹介し、中国人の好む広告を有効に利用する宣伝技術が詳しく分析されている。

---

2) 高綱博文『国際都市――上海のなかの日本人』、32頁。

3) 上海市國際貿易学會学術委員會編『上海対外貿易』(上)、上海社會科学院出版社、1989年11月、516頁。

4) 高綱博文『国際都市――上海のなかの日本人』、16頁。

5) 上海市國際貿易学會学術委員會編『上海対外貿易』(上)、上海社會科学院出版社、1989年11月、515頁。

6) 本論が使用した『申報』は上海書店が1980年に影印版したものである。影印版の『申報』は一部分欠損部分があるが、基本的に完璧に保存されたものである。

7)「日本広告」とは、日本に関するすべての広告である。広告主は国籍にかかわらず、日本人、中国人、西洋人でも『申報』に掲載された日本に関する広告を、「日本広告」とした。

そのことを証明するように当時の主要新聞『申報』において大量の日本広告が掲載された。広告主は主に輸出入の貿易商、医薬類商号、工業企業等に分けられる。日本広告から、日本の商号の営業業務、営業規模、営業方式等の具体的な状況が分かる。さらに、『申報』においてこれまで指摘されていない日本商人と商号が見られる。

(一) 輸出入貿易商

日清戦争の後、日本は資本主義の道へと進んだ結果、日本の対外貿易の商品構造が大いに変化した。初期には原材料を輸出したが、徐々に紡績製品、靴下等の工業製品の輸出に転換していった。『上海史話』の「上海に於ける日本及日本人の地位」に引用された大正4年（1915）刊上海総領事館報告書（内山清氏執筆）において「明治二十年以前に開業せる商店にして現存せるものは僅かに九店にして、三井物産会社を除く他の各商店の多くは、在留外人若くは日本人向の雑貨店なり。日清戦争当時に於て、一時当地本邦人中内地に引揚げたるもの多かりしが、其後漸次増加し、特に日露戦争以降非常なる発達をなせり。当地に於ける重要なる大商店の多くは、日露戦争後の開設に係るものにして、又支那第一革命事変当時、本邦雑貨が以外の盛況を呈したる為、明治四十四年より大正元年に互りて、小雑貨店の数増加せり。然るに斯くの如き同業者の激増は勢ひ供給過多となり、各商店ともに薄利となりし為大正二年以降は、記すべき商店の新設を見ざるに到りたり。」と記録されている[8]。上海における日本の貿易商は家族自営の雑貨商だけではなく、大手貿易商もあった。

これらの輸出入貿易商は上海における日本人の大部分を占めた。したがって、『申報』において貿易商が掲載した広告は日本広告の全数の大部分を占めた。本稿は『申報』において輸出入貿易商等の掲載した日本広告を整理し、先行研究と比較して、これまで指摘されていない日本貿易商等を見出した（表1参照）。

表1の史料に未見の日本の貿易商は主に食品、器具、工業製品、新型機械等を販売した貿易商であり、経営規模は三井、三菱のような大手会社と比較することができない。彼らの広告を掲載した目的がとても簡単で、商品を販売するためである。しかも、広告において商品の安価、サービスの周到等の内容を宣伝した。その種類の日本広告は広告の宣伝技術を運用せず、製品のブランドの構築も重視しなかった。

また、日本の貿易商は常に株式の募集、人材の招きと人事異動の情報を広告に発表した。これらの情報から貿易商の運営概況と発展の歴史などを詳しく知ることができる。例をあげると、一つの人事異動広告は以下のようである。

> 日商興盛公司　本行開設上海英租界香港路六号，專運日本時新綢緞、呢絨洋布、疋頭、絲布、縐布、洋布、棉紗、五金料器、機器、洋傘、雜貨等件，兼辦出口各貨。如蒙貴仕商定貨買現貨，無不公平克己約期無悞。前買辦雇君葆生已有高就，今請張君渠卿爲買辦，進出各貨無不精益求精，信義相孚以廣招徠。此白[9]

8) 米沢秀夫『上海史話』大空社、2002年1月、117-118頁。

9) 申報社『申報』（影印版第81本）、上海書店、第11735号（西1905年12月16日、土曜日）、911頁。

表1　史料に未記録の日本貿易商号

商号	開業時期	開業場所（上海）	業務内容
内田洋行	1896.5.8以前	盆湯街の新橋	人力車の輸入
順運洋行	1896.9.20以前	英租界大馬路同楽裏	通関申告の代理行
京華洋行	1896.9.24前後	仏租界洋涇浜4号	布、綿ヤーン、織機の販売
吉馴号	1897.8.12以前	北泥城橋東寿聖巷の向こう	人力車の輸入、修理
扶桑洋行	1897.9.29以前	五馬路13号	布、綿ヤーン、雑貨等の販売
勝貞洋行	1897.12.29以前	四馬路18号	布、毛布、漆器、雑貨等の販売
申興洋行	1898.1.25以前	英租界九江路4号	日本大阪平野紡績公司の綿ヤーンの専売
勢和洋行	1898.3.26前後	英租界棋盤街金隆裏58号	日本の雑貨の販売
久吉洋行	1900.1.1前後	英租界泗涇路5号	日本機器、紙の販売
升昌燭棧	1901.12.22以前	上洋鄧家木橋の北	蠟燭、線香、花火等の販売
岡田洋行	1902.10.12以前	四馬路恵福里	人力車の輸入
東成洋行	1903.10.12以前	盆湯弄橋北蘇州河	織機、人力車、水薬の販売
興盛公司	1905.12.16以前	英租界香港路6号	毛織物、機械、雑貨等の販売
田川洋行	1906.7.7以前	蓬路四川路2231号	雑貨、石炭等の販売
日豊洋行	1906.12.19前後	英大馬路の北にある貴州路7号	かばん、革靴、皮革等の販売
大川洋行	1907.12. 26以前 1909.11 1910.7	蘇州路524号 虹口蜜勒路A字6号に移った 江西路7号に移った	各種類の織機の輸入
河井洋行	1908.9.21以前	虹口蓬路四川路	日本の緞子の販売
東光洋行	1908.10.28以前	五馬路520号	石油ランプの販売
東進洋行	1911.3.6以前	虹口吳淞路795号	各種類の薬瓶の注文、販売
華倉洋行	1912.5.26以前	觀音閣碼頭吉祥裏の隣の2号	雑貨の販売、日本取引所の株式、綿ヤーン、米等の値段表の公布
大成公司總發行所	1912.5.26以前	四馬路202号	書畫の売り出し
臺華公司	1912.9.6以前	四川路10号	台湾と日本の特産、雑貨の輸入
栗生洋行	1912.11.11 1913.7	江西路30号 九江路A字1号に移った	輸出入、日本の株式の売買
三宅帽子公司支店	1913.4.1前後	棋盤街40号	各種類の帽子と原材料の発売
大信洋行出張所	1913.7.11以前	北蘇州路1287号	東京の佐藤衡器の発売
東大洋行	1914.3.1以前	漢口路A字9号	雑貨の販売

（日本の興盛公司　本行は上海の英租界の香港路の6号にあり、日本の最新流行の絹織物、毛織物、綿ヤーン、金属工芸品、機械、傘、雑貨等を専売します。お客様のご愛顧をお願い致します。価格はとても廉価です。前華人管理者雇葆生君が他に栄転したため、張渠卿君が新規の華人管理者として任用されました。以上、広告致します。）

以上の広告から、興盛公司は織物、機械、雑貨等を販売した貿易会社であり、1905年12月10日以前にイギリス租界香港路の6号に開業したことが分かる。しかも、興盛公司は上海の市場販路を開拓したため、華人管理者を雇用した。その前任者は華人の雇葆生であり、新任者は張渠卿であったことがわかる。この種類の広告は当時の日本貿易商の経営方式、経営規模等の具体的な状況を調べることに役立つ。

自主経営の貿易商の他、上海において専売に従事した日本の会社支店、卸売所、出張所等があった。

日本の三宅帽子会社が『申報』第14420号（1913.4.1）において掲載した支店広告を例としてあげる。

日商三宅草帽公司廣告 本公司設廠東京曆有十餘年，久已中外馳名。本廠專制冬夏各式時様大小呢絨帽，特備各種異様原料，業已自運來滬。本主人分設支店在棋盤街四十号門牌總批發所，交易價目格外公道，如荷各界賜雇請駕臨是幸[10]。
（日本三宅帽子会社の広告　本社が東京で工場を開設してから十余年の歴史があります。社名が日本の内外に知れ渡っています。本社は生産した各種の冬、夏の毛織帽子をすでに上海に運びました。支店は上海棋盤街40号に設けられました。価格がとても公正です。お客様のご愛顧をお願い致します。）

日本の三宅帽子会社が東京に設けた工場には長い歴史があり、高い知名度もあった。上海の業務を行うために棋盤街40号に支店を開設した。この支店は各種類の帽子の卸売を専門に取り扱っていた。以上のような広告に対する内容分析を通じて、上海において支店、卸売所、出張所があった日本の多くの会社は多年の発展を経て、大規模な経営をし、充分な実力があった会社である。しかも、これらの会社は上海ならびに中国の市場を開拓した際に、他人の力を借りることなく、自社の力を頼りに生産と販売を一体化して管理した。その結果、最大の利益を得ることができた。

また、上海における日本の貿易商は売買の仲介を行ったが、強い商品の特許権、ブランド意識が目立った。その例として東光洋行が『申報』第12838号（1908.10.28）に掲載した広告がある。（図１参照）

煤油電光燈 最新發明煤油電光燈者，蒙大日本帝國特准專賣之權利，本号一家專售。勿論敝國物質之良光明之遠，久蒙各國通商口岸播贊樂購矣。是燈嶄新利便欲普及於中國，開張大小發售，請要何器士商光雇試賣買是幸。此布 垂簽煤油電光燈其形如圖，燃火之間燈下並無暗影，高置放心燈下起動極有利便，所費火油至微一夜僅用一分，光力強大勝比電氣燈或瓦斯燈，其形高雅用法方便，隨時點滅自由轉置。遠地方速函報名本号接尅送詳說書是望。製造本鋪大中國總製造本鋪枝行上海日本東京大阪有田商會發售處五馬路五百二十号東光洋行[11]。
（石油ランプ　本社は大日本帝国に批准され、最新の発明の石油ランプの専売権を得ました。その石油ランプは中国で普及するため、本社は各種類の石油ランプを専売します。お客様のご愛顧をお願い致します。石油ランプの使い方はとても便利です。一晩に費やす灯油は一分しかありません。その上電球、ガスランプよりもっと明るいのです。使う時に自由に光度が調節できます。本社は日本東京と大阪にある有田商業連合会であり、上海の発売所が五馬路520号にある東光洋行です。）

東光洋行は日本政府により批准され、石油ランプの専売権を握ったため、広告において中国で他の商号が石油ランプを販売するのは違犯行為であるとされた。特許専売権、ブランドの独占権を強

10）申報社『申報』（影印版第121本）、上海書店、第14420号（西1913年４月１日、火曜日）、389頁。
11）申報社『申報』（影印版第96本）、上海書店、第12838号（西1908年10月28日、水曜日）、831頁。

図1 東光洋行石油ランプ広告

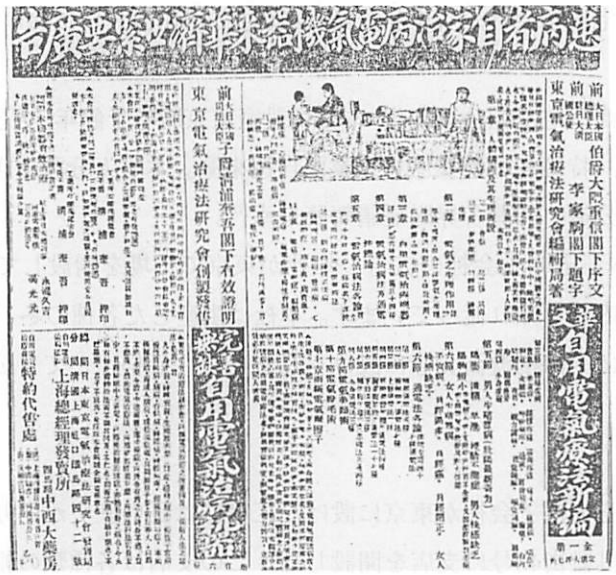

図2 自用電気治療法及機械の発売広告

調した広告が『申報』においてよく見られる。東亜同文会が編集した『支那経済全書』の第七輯において、特に看板と商標について両編の内容が説明されていた。当時上海における日本人は商業活動に従事した際に、特許専売権、ブランドの独占権の保護をとても重視したことがわかる。

(二) 医薬類商号

明治維新後、日本は医学の近代化の時代を迎えた。西洋医学が政府によって奨励され、日本医学の主体となっていった。同時に日本は海外の居留民の衛生施設と医療条件を大変重視したため、上海の日本人の医師や薬局、病院の設備は日本国内と遜色なく、日本人居留民の数が増加すると共にその数も増えていった[12]。それだけではなく、入江寅次の『邦人海外発展史』によると、日露戦争が勃発し、日本の行商の主力営業は薬剤の販売であった。マレー半島、ジャワ、スマトラ、ボルネオ等のすべての東南アジアにまで、日本の薬屋が伸びて行った。現地の人も中国人も、この薬屋から薬を買った。頭痛膏、千金丹、清心丹、宝丹、固腸丸、等々々、みな日本の幾十倍という値段でも飛ぶやうに売れて行った[13]。1905(明治38)年の日露戦争後には、日本の薬商が上海を拠点にして中国に多数進出してきた[14]。

『申報』において日本の病院、薬学院、医学院、医療機械販売所、薬店等を掲載した広告がよく見られる。これらの広告はすべての日本広告の中で一番大きな比重を占めた。『申報』に掲載された医薬類商店の広告を整理、分析し、先行研究と比較してみた。『申報』における医薬類広告からこれまで指摘されていない日本医薬類商店が次のように見られる(表2参照)。

医薬類広告は具体的には医事広告と薬事広告に分けられる。医事広告が主に日本の病院の住所、診療

12) 陳祖恩『上海に生きた日本人:幕末から敗戦まで』大修館、2010年7月、86頁。

13) 入江寅次『邦人海外発展史』(下)原書房、1981年12月、138頁。

14) 陳祖恩『上海に生きた日本人:幕末から敗戦まで』、93頁。

表２　史料に未記録の日本医薬類商号

商　　号	開業時期	開業場所（上海）	業務内容
原口謙爾	1896.4.2	不祥	医者
宮崎牛痘製造院	1901.4.1以前	虹口武昌路仁徳里	新鮮な痘苗を製造した
渡辺醫局	1904.4.21以前	虹口乍浦路169番	内外科婦人科小児科眼科肺など
朝日薬局	1907.3.29以前	上洋四馬路大街中市	日本の栄養剤
日本東京電器治治療法研究會発売局支局	1908.7.14以前	上海虹口鉄馬路42番	自用電器治療法を発売した
安騰全治堂	1912.10.23前後	虹口蓬路８番	日本式の鍼灸とマッサージ

時間、診療業務及び医学院の生徒募集等に関する広告である。以下の広告は日本病院を紹介した典型的な広告である。

快快看看　不佞久診治中國病客，對症投藥萬不悞一。□□發明天壽丸，寔稱救癱無上神劑聲譽益高。夫人獲疾不及請名醫診治，竟隕至貴生命，失至重財寶而不可復救回。不佞既以仁術為業，豈能忍坐視。即有病患者不問道裏遠近務應出診之，請內外科、婦女科、兒科、眼科、肺疾、梅毒、白濁、横痃等諸症一應治効如神，上海虹口乍浦路百六十九号大日本大醫渡邊醫局告白。[15]（□：印字不明）

（ご覧ください　本院は中国において患者を治療した長い歴史があり、病状に応じて投薬し、過ちを犯したことがありません。さらに、本院は開発した天寿丸という薬が救命神薬という高い名声を得ました。もし、病気になったなら、直ちによい医師の診療を受けなければ、命がなくなる恐れがあります。本院は仁愛の心を受けて、傍観することができない故、遠近を問わず必ず往診します。内科、外科、婦人科、小児科、眼科等の諸病気を治療することには優れた技能があります。以上、上海虹口乍浦路169号日本の渡辺病院から広告致します。）

日本の売薬商が『申報』に掲載した広告は主に薬剤と医療機械の効き目を紹介し、薬事広告と呼ばれている。薬事広告は宣伝技術とブランドの構築等の方法をとても重視した。しかも、よく図像広告を利用し、読者の注目を引き付けた。日本東京電器治療法研究会の発売局の上海支店が『申報』第12734号（1908.7.14）に掲載した広告では、患者が家で家庭用の治療電器機械を使用する図像を通じて、消費者に家庭用治療電器機械の使用方法を説明している。（図２参照）

また、ある医薬商は『申報』に掲載した広告を通じて、中国人に外国の医学技術と知識を紹介した。『申報』第14250号（1912.10.23）に掲載された「日本針灸按摩専家広告」という広告で、日本の伝統的な鍼灸療法及び西洋の電気マッサージ療法を紹介した。

日本針灸按摩專家廣告　本醫生專精東洋固有針灸療法，及西法電氣按摩，日本特有按摩各術，凡百病症均可療治，但病名繁多不能備載。至於日本按摩凡遇運動不能充分、精神過於勞役之人均極適宜，又衰弱病遺傳病可以預防傳染病重病亦有特效，世有講衛生求舒適以健身體而保長生者舍此無他途

15）申報社『申報』（影印版第76本）、上海書店、第11137号（西1904年４月21日、木曜日）、652頁。

焉。謂予不信請嘗試之，毎日上午九時至十二時門診，下午十二時至六時出診，虹口蓬路八号洋房電話二四零一。針灸醫生安騰全治堂啟[16]

（日本鍼灸とマッサージ専門家の広告　僕は日本の伝統的な鍼灸療法と西洋の電気マッサージ療法に精通しています。日本の伝統的鍼灸療法は万病を治療することができ、特に運動不足、精神緊張の人に適合し、衰弱病、遺伝病、伝染病の予防等に効果があります。お客様のご愛顧をお願い致します。診療時間は毎日午前9時から12時まで、往診時間は毎日午後12時から6時までです。病院は虹口蓬路8号にあります。電話は2401です。以上、日本鍼灸医師安騰全治堂から広告致します。）

㈢ 工業類企業

日本の工業に関わる企業は日露戦争をきっかけにして、全面的に上海に進出した。日本企業は次から次へと上海で工場を開設し、主に製紙、食品、絹糸、製革、石鹸等に関連した業界であった[17]。1911年に発生した辛亥革命は中国社会に大きな影響を与え、生活様式の変革を齎した。それらの変革は多くの新興工業の誕生を促進し、日本の商人にとって様々な投資の機会を齎した。1912年と1913年の二年間で日本の商人は上海においてガラス、紙製品、帽子、印刷、捺染、石鹸、牛乳等の業界に関した工場を20社開設した[18]。許金生が執筆した『近代上海日資工業史（1884-1937）』において近代上海の日本工業の発展について詳細な記録があるが、ここでは『申報』に記録されていない日資工場について述べたい。

まず、東来洋行が『申報』第10522号（1902.8.4）に掲載した広告を見てみたい。

日商東來洋行 本行向在日本大阪地方開張，專造精致大小皮棍，凡蒙購□無不稱許。茲見中國商務蒸蒸日上，爰在上海芭于路北營造廠屋壹所，聘請日本頭等司匠在中制造，務極精美定價更格外從廉，所以副光雇者之雅意也。且購用本廠之貨，設系□次殘壞，可携至本廠修理不取修費，庶幾生意愈推愈廣本主人有厚望焉。其貨概歸法大馬路興聖街口泰生祥東洋莊壹家經售，倘蒙賜雇或要預約者均移玉至該処看貨面議可也。此佈[19]（□：印字不明）

（日本の東来洋行　本行は日本大阪においてローラーの製造工場を開設しました。品質が良いため、多くの人々に称賛されました。最近中国の商務が日増しに発展してきた機会に、上海の芭于路に工場を設立し、日本で一番の優れた職人を招聘しました。製品の価格がとても公正であり、品質が一番良いものです。もし、お客様が購買した製品が壊れば、本社で修理しても費用がいりません。本行の製品の専売権はフランス租界の大馬路の興聖街にある泰生祥東洋莊に属しています。お客様は泰生祥東洋莊にお出で頂いて面談されても結構です。以上、広告致します。）

ローラーとは、鋼の棒を中心にし、表面を皮革或いは人造ゴムで包み、紡績機械の牽引装置の主要部

16）申報社『申報』（影印版第119本）、上海書店、第14250号（西1912年10月23日、水曜日）、238頁。
17）許金生『近代上海日資工業史（1884-1937）』、学林出版社、2009年5月、15頁。
18）許金生『近代上海日資工業史（1884-1937）』、17頁。
19）申報社『申報』（影印版第71本）、上海書店、第10522号（西1902年8月4日、月曜日）、652頁。

品である。東来洋行が上海の芭于路においてローラーの製造工場を開設したのは1902年８月頃のことだと推測できる。しかも、工場は特に日本から優れた職人を製造作業の担当者に迎えた。さらに、広告において、もし工場の製品が品質のせいで壊れたら、工場は無償で修理した。東来洋行は現代的なアフタ・サービスの意識の芽生えを生み出したと言える。『近代上海日資工業史（1884-1937）』において、日本の紡績機械の加工工場について、「日本の商人は最初に上海の金属加工業に進出した具体的な時間が不祥である。（中略）遅くても1901年、金属加工業に従事した日本人は上海に進出したはずである。」と簡単な説明しかない。つまり、具体的に証明できる実例を探し出せていない。東来洋行が『申報』第10522号に掲載した広告は、1914年前に上海の日本の金属加工工場に関する研究不足を多少補うことができ、早期に上海に進出した日本金属加工工場の基本的な状況を理解することができる。

この広告によって、早期の日本の金属加工工場は製品の生産と販売を分けていたことがわかる。上海ならびに中国の市場を開拓するため、東来洋行はフランス租界の大馬路の興聖街にあった泰生祥東洋荘に委託し、製品を販売した。東洋荘は上海の本地市場をよく知っていたのみならず、日本商人を深く了解していた。したがって、東洋荘によって、日本製品を販売したのは、早期に上海の日本工場が本場の市場に進出できない厄介な局面を打開するためであった。

次は、成記という商号が『申報』第13693号（1911.3.26）に掲載した広告を見てみたい。

> 豐泰成記肥皂廠謹擇三月初一日開市廣告　本廠開設上海西門外紅房對面，向自日商村田龜太郎君首創，旋為有事回國。繼辦者經理稍涉大意，以致貨不應消。今由成記接辦，延請日本精明廠司木下勘治郎君選辦上品各料，特別精緻塊皂條皂另蹔批發，貨美價廉早為各界諸君所佳許。凡蒙賜雇者須認明豐泰成記字型大小，箱內仿單上標百福呈祥為記，庶免魚目混珠，恐遠近未能周知，特此登報以供臺覽[20]。
>
> （豊泰成記石鹸工場は３月１日に開業する広告　本工場は上海の西門外の赤い建物の向い側にあり、日本の村田亀太郎によって創立されました。村田君は個人的な理由で帰国し、工場を譲り渡しましたが、失敗してしまいました。その後、成記が工場を引き継ぎました。元の工場長木下勘治郎を任用し、上品な原料を仕入れました。ご愛顧の方は豊泰成記の商標を識別されることをお願い致します。）

この広告から、豊泰成記という石鹸工場の旧名は豊泰石鹸工場であったことが推測できる。創設者は日本の商人村田亀太郎であり、工場長が木下勘治郎であった。場所は上海西門外の赤い建物の附近にあった。その後、村田亀太郎は個人的な原因で日本に戻った。工場が何度も譲渡されたが、最後に成記によって引き継がれた。村田亀太郎に関して、小林商店が発行した『歯磨の歴史』に「（小林富次郎）が12月29日漢口を出発し、万像新たなる明治四十年（1907年）１月元旦上海に着いた。上海に於ては、真に屠蘇を祝う間もなく東奔西走し、村田亀太郎氏の紹介にて、小岩井源司氏に同地販売を一任し、支那方

20）申報社『申報』（影印版第111本）、上海書店、第13693号（西1911年３月26日、日曜日）、401頁。

面の担任者として任炳栄を傭入れ、茲に上海支店の設置を見るに至ったのである。」[21] という一文しかない。1907年に村田亀太郎はまた上海で豊泰石鹸工場を経営していた。さらに、豊泰石鹸工場に関して、日本外務省が発行した『通商公報』第18号において、大正2年（1913年）上海の石鹸工場を総括した時、「洗濯石鹸の製造所は一時多数に上りたるも漸次淘汰せられ現今二十余の工場あり今其主なるものの製造力を示せば左の如し：製造所名、豊泰：国人別、支那：毎月製造力、2000箱　一箱は百二十個若しくは百四十四個入。」[22]というように豊泰石鹸工場に言及した。この時期の豊泰は中国人に開設された石鹸工場であった。その他、東亜同文書院は『支那経済全書』の第12輯において、東亞同文会の学生が行った1908年の調査記録によって豊奏号という石鹸工場を見出せる。「豊奏印　在上海日本人豊奏号製にして一号より四号に至る一号一打一圓六十八銭、二号一打一圓八銭、三号七打七十二銭、四号一打四十二銭とす該品は日尚浅くして販路未だ上海の一部分に過ぎざるも之が拡張の一法として処々の雑貨店に販売を委託し二尺位の硝子器中に入れ赤色紙の包装に金字の施しあるて人目を惹きつ、以下略」[23]。しかも、『近代上海日資工業史（1884-1937）』において豊奏号は大体1905年前に開業したが、数年後に倒産したことを記録した。それでは、開業時期、閉店時間、工場名が似ていた豊泰号と豊奏号は実は同じ工場だという可能性があるが、これまで資料不足のため、豊泰号と豊奏号の関係は不明である。もし同一とするならば、この豊泰という石鹸工場はこれまで記録されていなかった工場と言える。

㈣　他の種類の日本商号

以上の3つの種類のほか、『申報』において掲載された日本広告は金融業、出版業、運輸業、娯楽業、教育業及び個人活動の広告が多く見られる。これらの広告は上海における日本人の様々な商業活動、具体的な活動内容、状況等を反映している。先行研究を比較し、『申報』においてこれまで指摘されていない商号及び個人は次のようである（表3参照）。

金融業、出版業、運輸業などが長期的に『申報』において広告を掲載したことと比べ、大部分の商店の経営規模は大きくないため、彼らは広告を掲載する時にタイミングを非常に重視した。例をあげると、村山理髪店は辛亥革命の辮髪を切断するブームに対応した広告を『申報』第13950号（1911.12.16）に掲載した。

> 日本村山剪發店　本店向在虹口北四川路多年，支店在英界福建路五十壹号，承蒙光顧無論中西紳商各界壹律優待，毎位壹角。[24]
>
> （日本の村山理髪店　本店は虹口の四川路で経営してから長い年月を経ています。支店はイギリス租界の福建路51号にあります。お客様のご愛顧をお願い致します。毎回1角です。）

21）小林富次郎編『歯磨の歴史』、小林商店発行、1935年12月、347-348頁。

22）外務省通商局編『通商公報』（復刻版　第18號）、不二出版、11頁。

23）東亜同文會編『中國経済全書』（第十二輯）、南天書局、1989年、642頁。

24）申報社『申報』（影印版第115本）、上海書店、第13950号（西1911年12月16日、日曜日）、658頁。

表３　史料に未記録のその他の商号

商号	開業時期	開業場所（上海）	業務内容
兼松洋行	1901.2.28前後	フランス租界大馬路口	日本海上保険会社の代理店
興済汽船會社	1904.1.7以前	英国租界江西路口	内地航路
日宗火災保険会社	1906.3.10前後	福州路５号	火災保険
日本海上運送保険會社	1906.6.11以前	広東路の大阪会社の上	海上保険
村上弁護士	1906.10.12以前	不祥	弁護士
日本人公務員	1907.7.21	不祥	本職公務員、兼職日本語教師
福岡弁護士	1908.7.10前後	英国租界大馬路15号	弁護士、東亜同文書院法律教習
怡情園	1909.7.15	泥城橋外靜安寺路朝南膠洲路	観光公園
満州日露戦争鉄道會社	1909.11.16	虹口海寧路	東洋汽車劇
村山理髪店	1911.12以前	虹口北四川路 支店福建路51号	理髪店
天勝娘	1913.7.3	張園に演出	マジックショー
松旭中班	1914.3.16	大馬路の開明新劇社	劇の演出
大竹娘子劇団	1914.6.1	大馬路泥城桥の跑馬庁の向こう	マーカスの演出
伊藤書院	1914.8.21以前	貴州路逢吉裏一弄	日本語の教習

上海虹口の四川路にあった日本の村山理髪店が多年の経営を経て、イギリス租界の福建路51号に支店を開設した。しかしながら、十数年の『申報』において村山理髪店は1911年の第13950号に一件の広告を掲載しただけである。その目的はとても明確である。辮髪を切断するブームの到来を掴んで、知名度を上げ、得意先を広げたことである。

また、日本人の個人商業活動の中で、「天勝娘」という日本の女性のマジシャンが、仙人のようなきれいな容貌とずば抜けた技巧で、上海においで人気を博した。そこで広告主は天勝娘という有名人の効果を利用して自社の製品を宣伝した。『申報』第14513号（1913.7.3）に最初の「天勝娘」の広告が掲載された。

世界大魔術家日本第一美女全班到滬　天勝娘全班到滬　日本天勝娘者全球第一大魔術家也，精催眠術容顔絶代美貌如仙，全班三十餘人亦均系日本美女，所演各戯如人能騰空、雀能排隊、猛火燒身而不壊、流水隨指在東西、縛全體之鎖繩登時解鈕、種四時之嘉卉傾刻開花億狀千名不可枚舉。奪造化之神奇，洩陰陽之巧秘，逐日更換層出不窮，每一登臺玉貌珠顔蜃樓海市，觀者咋舌見者醉心誠世界之奇觀。更曾挾技遍遊歐美各國，君主總統名公偉人均有金牌奬賞，美國大幻術家尼古喇曾大加歡服自謂不如，東西各國久已名震一時，惟從未到過中國，今値上海民強報館周年紀念之期，舉行第二次研究華洋物品會，因為蒞會遊覽諸君輔助餘興起見，不惜重資特雇來華，准於陽曆七月六號起（即陰曆六月初三日）每晚八鐘在張園會場開演，尚希連袂偕臨至為企盼，椅位每位特別三元，頭等二元二等一元，會場門票二角，禮拜六禮拜日三角。第二次研究華洋物品會謹啟[25]

（世界で有名なマジシャン、日本第一の美人、天勝娘一座は上海で公演　日本の天勝娘は世界第一の

25）申報社『申報』（影印版第123本）、上海書店、第14513号（西1913年７月３日、木曜日）、37頁。

マジシャンであり、催眠術に精通し、美しい容貌です。一座はすべて日本の美人であり、30余人がいます。公演は、人が空に昇ること、雀を列に並べられること、強火で身を燃やせること、全身をしばる縄をほどくこと等があり、観客を非常に感嘆させ、天下の奇観を認識させます。天勝娘一座は欧米諸国において公演したことがあります。諸国の君主、大統領も金メダルのほうびを与えました。天勝娘の名声は欧米諸国に知れわたっていましたが、中国で公演したことがありません。上海の民強新聞社の周年記念期にあたって、第二回中外品物の研究大会が開催されました。参会した諸君に座を盛り上がるために、金を惜しまず、天勝娘一座を大会に招待します。西暦7月6日から毎晩8時に張園会場において公演を始めます。頭等席は3元であり、一等の席は2元、二等の席は1元、入場の普通券は2角ですが、土、日曜日は3角です。第二回中外品物研究大会謹啓。)

世界第一のマジシャン、日本第一の美人と褒め称えられる天勝娘は、上海の民強新聞社の招待に応じて、上海に赴いて、上海の張園においてマジックショーを初めて上演した。その公演は民衆の強烈な反響を引き起こした。天勝娘も人気がある有名人になった。その後、日本の中山太陽堂は『申報』第14524号（1913.7.14）に「天勝娘与隻美人洗脸粉」という広告を掲載した。(図3参照)。

天勝娘與雙美人洗臉粉　民強報館特厚聘來滬為滬上各界每晚在張園會場開演，絕技如神令人驚歎不置，真容顏絕大美貌如仙，世界第一大魔術家天勝娘，及同一行諸娘者，均雙美人洗臉粉之愛用者也。雙美人牌洗臉粉系本鋪所悉心虔造，凡顏面肌膚毛髮用之一洗，無不去垢生光而於保全人體自然之美，與他香皂類其差天淵實妝臺絕品也。 用法 此粉用法每三之分放手掌中，用水小汗調勻以擦面，複用清水洗面，其功效潤膩爽快異常美不勝舉也。 天下有各樣香皂可是均不敵雙美人洗臉粉。 日本東京大阪雙美人牌牙粉香粉化妝水本鋪中山太陽堂 上海河南路102號 總經理 東亞公司[26]

(ずば抜けた技巧と仙人のようにきれいな容貌がある世界一の女性マジシャン日本の天勝娘は雙美人洗顔粉の愛用者です。お客様は雙美人洗顔粉で顔、肌、髪を洗うならば、すぐさま垢を落すことができ、自然美を発散することができます。化粧石鹸類の製品と比べて、効果は天地の差があります。本社は日本の東京と大阪の中山太陽堂です。発売所は上海の河南路102号にある東亜公司です。)

この広告は『申報』における日本広告の中で最初に写真を添えたものである。化粧品のメーカー中山太陽堂は「天勝娘」の名義で広告を掲載し、天勝娘のきれいな容貌の写真を添えた。こうすれば、天勝娘の有名人効果で製品の知名度を高めて、彼女に対する消費者の好感度を製品に移すことができると考えたのである。

26) 申報社『申報』(影印版第123本)、上海書店、第14524號（西1913年7月14日、月曜日)、194頁。

図３　天勝娘と双美人洗脸粉の広告

三　清末民初上海における日本人の商業活動

㈠　丸橋女医の従業史

『上海に生きた日本人：幕末から敗戦まで』によれば、1876（明治９）年11月、上海在住のわずか100人余りの日本人居留民の医療上の問題を解決するために、日本総領事の品川忠道は広業洋行支配人・松尾巳代治、有馬天然代理人・栗田富之助、三菱会社上海支配人・内田耕作、東本願寺別院輪番・河琦顕成等六名の代表を集めて相談し、日本政府に対して日本人医師一名を派遣することを請願した。[27] 翌年７月、上海で最初の日本人医師として早川純瑕が政府から派遣され、東本願寺上海別院に診療所を開設し、日本人居留民には診察費を免除して薬代だけを取り、貧しい者は領事館の証明によってすべて無料とした。[28] 明治時代上海における日本人の医師は主に西洋医であり、医学院の学位と医師資格を持った名医である。例えば、用吉佐久馬、阪田石之助、片山敦彦、筱崎都香佐、佐佐木金次郎、綿貫與三郎、吉益東洞等である。さらに日本の女医丸橋志津子がいた。『上海に生きた日本人:幕末から敗戦まで』によって、丸橋女医は上海における最初の女性の医師であり、派克路（現在の黄河路）において丸橋病院を開き、1902年に上海における日本の医学会の会員になったという簡単な記録が見られる。『申報』において幸運にもこの医師の足跡を見出した。

『申報』第8156号（1896.1.1）に「日本神医丸橋女史遷居」という広告が掲載された。

> 日本神医丸橋女史遷居　去年在滬屢愈專症，外科尤著奇效。今已重來，寓北蘇州路第三十八號洋房，照常開診此佈[29]。

27）陳祖恩『上海に生きた日本人：幕末から敗戦まで』、大修館、2010年７月、86頁。

28）陳祖恩『上海に生きた日本人：幕末から敗戦まで』、87頁。

29）申報社『申報』（影印版第52本）、上海書店、第8156號（西1896年１月１日、火曜日）、５頁。

（日本の名医丸橋女史の移転広告　日本の名医丸橋女史は去年に上海において病人を治し、特に外科に精通しています。現在上海に戻り、北蘇州路第38号においてふただび開業し、診察しています。以上、広告致します。）

のちに『申報』第8519号（1896.1.2）において「海外神医」という広告が掲載された。

海外神医　日本女医学士丸橋光素以國手稱，航海來申活人無算，今夏回國茲已重來，毎日午前在乍浦路七十四號洋房，午後寓三馬路全亨棧對門清華室樓上，凡我華人之抱恙者盍請其妙手回春乎[30]。
（海外名医　日本の女子医学士丸橋氏は優れた医術で有名です。上海で多数の病人を治しました。今年の夏に日本に帰りましたが、現在上海に戻り、再び開業しました。毎日午前中は乍浦路74号にて診察し、午後は三馬路全亨棧近くの清華室の階上において診察しています。）

『申報』第8588号（1897.3.17）にも丸橋女医についての広告が掲載された。

日本丸橋女医　東京女医学士丸橋氏久寓申江，熟察華人病症活人無算，尤精外科。茲移家虹口乍浦路新開總會隔壁九十七號洋房，抱恙者前往診之[31]。
（日本の丸橋女医　東京の女医学士丸橋氏は久しく上海に居住していました。多数の華人の病人を治し、特に外科に精通しています。虹口の乍浦路97号に移転しました。以上、広告致します。）

以上の3件の広告から、1895年から1897年までの丸橋氏の従業史が分かる。丸橋氏が1895年上海に来て、優れた外科の医術をもち、多くの病人を治療した。丸橋氏は1896年の年初に日本から上海に戻って、再び蘇州路第38号において開業した。また、1896年の夏に日本に帰った。その後、1897年の年初に上海に戻って診察を継続し、午前に乍浦路の74号で診察し、午後には三馬路の全亨棧棧の近くで診察した。それから、1897年3月中旬に、丸橋氏は住居を移し、虹口乍浦路の97号において開業した。1897年3月の後『申報』において丸橋女医に関する広告が見られないが、以上の広告から丸橋女医は上海における医者として活動していたことがわかる。

(二) 日本広告から見る日本洋行の開業時期

『日本対滬投資』においては日本対中国の輸出入に従事した日本洋行に関して、特に詳細に述べられている。同書によれば、日本の鹿島洋行は1931年8月に上海で開業し、絹織物、紡績製品等を上海に輸入していたことが分かる[32]。しかしながら、『申報』第8343号（1896.7.10）に「鹿島洋行經售日本棉紗」という広告が見られ鹿島洋行の1931年前の活動がわかる。

30）申報社『申報』（影印版第52本）、上海書店、第8159號（西1896年1月4日、土曜日）、24頁。
31）申報社『申報』（影印版第55本）、上海書店、第8588號（西1897年3月17日、水曜日）、424頁。
32）張肖梅著『日本対滬投資』、商務印書館、1937年、92頁。

鹿島洋行經售日本棉紗　啟者本行現有新到闊狹各色棉條，並上白縐布、新色時花金縐五彩織絲摹本緞、太陽牌手形牌皮酒等物出售。倘貴商欲要定織各種絨布請至四川路二十號門牌本帳房面議可也。[33]

（鹿島洋行が日本からの綿ヤーンを販売致します。啟者、本行は新着した様々な綿ヤーン、白い縐布、多彩の絹織物等を販売します。お客様は四川路の20号にある本行の帳場にお出で頂いて面談しても結構です。）

『日本対滬投資』の記録と同じように鹿島洋行は織物、紡績製品等の商品を売買し、四川路の20号にあった。しかも、以上の広告から、鹿島洋行は遅くとも1896年７月10日以前に開業し始めたことが推測できる。その開業時期は『日本対滬投資』に記録された1931年８月の開業時期と大きな差がある。

米沢秀夫が『上海史話』において日本の雑貨商店に関して、特に表を用いて詳細に記録した。これによれば、吉隆洋行は明治32年、即ち西暦の1899年上海で開業したことが分かる[34]。しかしながら、『申報』第8555号（1897.2.12）において「新開吉隆洋行經售日本棉紗」という広告が見られる。

新開吉隆洋行經售日本棉紗　啟者茲有日本象塔老牌棉紗歸小行獨家出售加工選造，潔白細勻斤兩放足，價比別家公道格外以廣招徠。倘蒙貴商賜顧請至美租界盆湯街橋西首面議可也[35]。

（新しく開業した吉隆洋行が日本の綿ヤーンを販売致します。啟者、本行は日本の象塔ブラントの綿ヤーンを販売しています。象塔ブラントの綿ヤーンは純白であり、重みが充分で、価格はとても公正です。お客様はアメリカ租界の盆湯街にある本行にお出で頂いて面談しても結構です。）

この広告から、『上海史話』に記録された吉隆洋行の開業時期が相違していたことが分かる。吉隆洋行の開業時期は1897年２月頃に開業し始めたことが推測できる。

『日本対滬投資』によれば、田辺洋行は1897年に上海において開業し、玩具、文房具、染料、紡績用品等の雑貨を販売した[36]。しかしながら、『申報』第9221号（1898.12.14）において「上海新開日商田辺洋行」という広告が見られる。

上海新開日商田邊洋行　本行開設東洋十有八年，自製各色雑貨無不精價極相宜。承仕商賜顧遠近馳名，今分設上洋法租界三洋涇橋臨平裏內，自運上等各色雑貨及東洋車，零趸批發無不格外公道，如蒙貴商光顧認明本行招牌庶不致悞[37]。

（上海において新しく開業した日本の田辺洋行　本行は日本において18年の歴史があります。製造した各種類の商品は上品で、価格がとても公正です。ご愛顧者のおかげで、遠くまで名が知られて

33）申報社『申報』（影印版第53本）、上海書店、第8343號（西1896年７月10日、金曜日）、454頁。
34）米沢秀夫『上海史話』、大空社、2002年１月、120頁。
35）申報社『申報』（影印版第55本）、上海書店、第8555號（西1897年２月12日、金曜日）、220頁。
36）張肖梅著『日本対滬投資』、商務印書館、1937年、93頁。
37）申報社『申報』（影印版第60本）、上海書店、第9221號（西1898年12月14日、水曜日）、744頁。

います。現在上海のフランス租界の三洋涇橋の臨平裏において支店を設立しています。お客様は本行にお出で頂いて面談しても結構です。)

この広告から、『日本対滬投資』に記録された田辺洋行の開業時期が相違していたことが分かる。田辺洋行は日本において開設してから18年の歴史があり、1897年2月ごろに上海において支店を設立したことが推測できる。

『日本対滬投資』によれば、小林洋行は1913年1月に上海において開業し、歯磨き粉、工業薬等の商品を上海に輸入し、販売した[38]。そして、『近代上海日資工業史(1884-1937)』では1913年ライオン歯磨き粉の日本本社は小林真一を上海において支店を設けるために派遣したことに言及している[39]。小林商店で出版された社史『歯磨きの歴史』において、「明治39年10月より40年5月迄、千代は更に当時の我社理事神谷市太郎氏を同伴し、(中略)12月29日漢口を出発し、万像新たなる明治40年(1907年)1月元旦上海に着いた。上海に於ては、真に屠蘇を祝う間もなく東奔西走し、村田亀太郎氏の紹介にて、小岩井源司氏に同地販売を一任し、支那方面の担任者として任炳栄を傭入れ、茲に上海支店の設置を見るに至ったのである。」と言及された[40]。小林洋行は上海において開業した時期について、『日本対滬投資』、『近代上海日資工業史(1884-1937)』では1913年としたが、『歯磨きの歴史』が主張したのは1907年1月であった。どちらが正しいであろうか。『申報』第12998号(1909.4.13)において小林洋行が掲載した広告から見てみたい。(図4参照)

獅子老牌牙粉　本行在日本東京開設已數十年矣，所制獅子老牌牙粉以及香粉，並各色香水香油等，悉依最新科学製造盡善盡美，並延專門各家充應顧問隨時指點，不惜重資精益求精，所出各貨新奇無比，與別家大不相同，是以遐邇馳名行銷日廣，即歐美各邦每年運銷為數甚鉅，若非物品精良豈能暢銷於數萬裏外乎？近因風氣大開，本行各貨夠用最宜，本行主人有鑒於此，今來上海設一分行銷本行自做各貨，批發零蕚各從其便，而且定購各貨無須捐客經手，所以其價格外公道，定貨迅速訂期不悞意在招徠。總期暢旺貿易而乘久遠，因此凡本行所賣價值與日本行市並不懸殊，此乃本行在申獨一無二之特色，雖獲利較薄而多多益善也。如蒙賜雇者移玉至小林洋行便是，看貨議價自知所言不謬，今將總行分行製造廠之地址開列於左，總行東京市神田區柳原川岸念二號地、大阪市東區博勞町二丁目，分行清國天津日租界旭街漢口河街、上海法租界吉祥街總批發處日商小林洋行代售處同所東林號。[41]

(ライオン歯磨き粉　本行は日本の東京において数十年前に設立されました。最新の科学製造方法を利用し、生産したライオン歯磨き粉、おしろいと香水等は、右にでるものがありません。全世界に知れわたり、欧米諸国にも販路を広げています。本行は最近上海において支店を設立し、製品を販売致しております。そして、お客様は仲介の販売店を通じることなく、直接に本行の支店におい

38) 張肖梅著『日本対滬投資』、商務印書館、1937年、95頁。

39) 許金生『近代上海日資工業史(1884-1937)』、学林出版社、2009年5月、140-141頁。

40) 小林富次郎編『歯磨の歴史』、小林商店発行、1935年12月、347-348頁。

41) 申報社『申報』(影印版第99本)、上海書店、第12998號(西1909年4月13日、火曜日)、626頁。

図4 ライオン歯磨き粉広告

てライオン・ブランドの製品を買うことができます。商品の価格はとても廉価であります。ご愛顧者は本行の支店にお出で頂いて購入しても結構です。本行は東京市神田区柳原川岸22号、大阪市東区博労町２丁目にあります。支店は清国天津の日本租界旭街、漢口河街と上海フランス租界吉祥街にあります。）

以上の広告によって、ライオン・ブランドの歯磨き粉を生産した小林洋行は、日本の東京において長い歴史をもっていた。小林洋行は仲介の販売店に頼まず、上海において支店を開設したことを通じて、上海の販路を広げることになった。支店は上海のフランス租界の吉祥街にあり、取引先の発注の受けつけ、商品の卸売及び小売り等の業務を担当した。以上の広告は1909年４月13日に『申報』に掲載されたため、小林洋行の上海支店の開業時期は、小林商店株式会社の社史『歯磨の歴史』が述べたように1909年４月以前のはずである。そこで、『日本対滬投資』及び『近代上海日資工業史（1884-1937）』における小林洋行の上海支店の開業時期に関する記録は、間違っていることが分かる。

『日本対滬投資』によれば、黒越公司は1922年６月に上海において開業し、専門的に印刷インキ、印刷機等を上海に輸入した。しかしながら、『申報』第14230号（1912.10.2）において掲載された黒越公司の移転広告が見られる。

遷移廣告　啟者本公司向在日本大阪創設有年，自前年分設上海以來乃承惠顧，諸君源源樂購日增月盛，以至房屋狹小。今遷移在虹口乍浦路二百七十四號門牌，仍以鉛印石印、火柴商標、照相銅版等，並有鉛印石印機械以及各種附屬器具，本公司均是督工製造，早經購馳名有目共賞。茲因遷居伊始，本公司更常精益求精以廣招徠，無論零蕓品物益求精良、價格從廉以答惠顧諸君之盛意也。 黒越公司上海支店啟[42]

（移転広告　啓者、本社は日本の大阪に設立され、一昨年に上海において支社を開設してから、売れ行きが年々増えてきました。場所が狭くて小さいため、現在は虹口乍浦路274号に移転しました。経営業務はまた従来どおり活版印刷、石版印刷、マッチの商標、写真用の銅版及び印刷用の機械の販

42）申報社『申報』（影印版第119本）、上海書店、第14230號（西1912年10月２日、水曜日）、18頁。

売です。価格はとても廉価であります。お客様の愛顧をお願い致します。)

そして、黒越公司はまた『申報』第14289号（1912.12.1）に「印墨批発」という広告を掲載した。

印墨批發　本公司專制各種鉛印石印以及照相銅版商標用各色印油，並鉛印石印等各種機器及附屬器具，行銷中外以曆有年。自前年分設上海，以便賜顧者就近購取，因恐各埠未及週知，茲特佈告無論零趸批發，本公司均極誠歡迎並備有顏色樣本。如欲取閱祈請函示，賜顧者請至虹口乍浦路二百七十四號門牌便是。 此布 電話三千六百四十七號 黒越公司啟[43]
(印刷インクの卸売　本社は活版印刷、石版印刷、マッチの商標、写真用の銅版及び各種類の印刷用の機械を販売致します。前年から上海において支店を開設しました。各埠頭の本社を知らない顧客に知らせるように、特に広告を掲載します。ご愛顧者は虹口乍浦路274号にある本社にお出で頂いて見本を見られても結構です。)

黒越公司は、1912年に掲載した2件の広告において「前年に上海において支社を開設しました」と言及した。これによれば、黒越公司が上海において支社を開設したのは1910年であり、1912年10月に業務の拡大のために虹口乍浦路274号に移転したことが分かる。したがって、『日本対滬投資』の記録、つまり黒越公司が1922年6月に上海において開業したことは間違っていると推測できる。

四　結び

上述したように、1896年から1914年まで上海で刊行されていた『申報』の日本広告を中心にして日本人の商業活動について述べた。日清戦争の後、日本は中国と1895年4月17日に下関講和条約を締結した。その結果、上海やその他の開港場における様々な権利を借り、租界設置権を獲得し、中国の開港場における工業企業の設立権と機械の輸入権を取得した。日清戦争直前の日本人の上海での居留民数は1,000人前後であったが、第一次世界大戦前には11,457人となった。当時イギリス人の居留民を抜いて在留外国人数で第一位を占めた[44]。この時期に日本の資本主義が急激に発展したため、上海における日本人の商業活動も益々活発となった。この時期は上海における日本人の商業活動の全盛期と呼ぶにふさわしい。本稿は『申報』における日本広告の内容について分析し、上海における日本人の商業活動が以下の特徴をあらわしていることを明らかにした。

まず、上海における日本人の商業活動の業種が日清戦争前と比べて増加していた。初期の単一の業種より、戦後の業種は商店、病院、薬局、出版業、運輸、金融、教育、製造等多種多様である。当時上海の大部分の業種の中で日本人の姿が見られると言える。次に、上海における日本人の職業には大きな変化があった。初期の新聞に掲載された日本の広告を分析すれば、当時の日本人はサービス等の肉体労働

43) 申報社『申報』（影印版第119本）、上海書店、第14289號（西1912年12月1日、日曜日）、715頁。
44) 高綱博文『国際都市——上海のなかの日本人』、32頁。

及び原材料の輸出入等の簡単な商業活動で生計を立てたことが分かる。日清戦争の後、上海における日本人は頭脳労働、資本経営等の上層の業種に傾いていた。例えば、証券取引、保険業、教育、医者等である。最後、上海における日本人の商業活動は分業細分化という特徴を現し始めた。ある業界のためにサービスする付属の業界が現れた。例えば、病院のための医療器械製造の会社、出版社のための印刷インキ、印刷用機械製造の会社、紡績工場のための紡績用機械製造の会社等が上海に現れたのである。

〔付記〕 謝薇：中國南昌大学新聞與伝播学系講師。本論は、中国南昌大学新聞与伝播学系教員の海外派遣による研究成果の一部である。